毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢

明治三十年三月廿五日發兌



第九拾八號

鐵道王グールド

定價金廿錢
郵稅金二錢

●●●●讀賣新聞評 是は米大洲物質的進潮の上に立ち實業世界を併呑したる偉人グールドの傳記なり氏や一介の賤夫より起て鐵道大王の無上權を掌握し大陸無數の生民をして其一擧手一投足の間に休戚を分たしむるに至りたるは實に讃嘆の外なしと雖も一面を顧みれば其人を欺き友を賣り信義道德を二三にして唯是れ私利に汲々たりしは彼れが傳記に一大欠點を印する所以にして讀んで茲に至れば痛嘆に堪えざるなり若夫れ彼が罪に因りて深く究むれば當時米國政治社會の腐敗の甚だしきを見る法官議會官吏は彼れの黄白に眩され彼れの奴僕となり專ら其利をのみ圖れば弱者は之が爲めに悲境に沈沒し道德は之れが爲めに靡爛せり此が紫されーグールドを傳するものなりと雖も亦米國政治社會腐敗の絶叫なり今や我國偉人グールドの生出を望むと共に我政治社會が米國の轍を踏まざらんことを切望して止まざるなり

社會叢書第五卷

資本の活用

定價十錢
郵稅二錢

中龍見著（口繪入）

詩人西行

定價十三錢
郵稅二錢

奥中將題字東條中佐序文

兵營小訓

定價十五錢
郵稅四錢

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

近刊豫告

木戸孝允

本社出版の傳記評傳各書は世已に定評あり、其今日に至り重版續出、盛に世の需めに應じて止まざる、以て各書の價値を評定するに足りぬべし。今本書「木戸孝允」評傳の刊行に着手す、蓋し掉尾の好著作たるを信ず、其批判は應さに旬週の後に明かなるべし。

既刊

塚越芳太郎著

近松著作一班

定價卅五錢
郵稅八錢

乾坤一布衣著

最暗黑の東京

定價十三錢
郵稅二錢

世界叢書第一篇

ダーウヰン

定價十五錢
郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		
一冊	金五錢	地方郵税 金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	共金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	共金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號本局七十番

發行兼編輯人 吉崎圓吉

印刷人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十年三月廿五日發行

家庭雜誌第九拾八號

目錄



家庭雜誌第九拾八號

（明治三十年三月廿五日發兌）

社説

學問の食傷

食物は身躰を養ふものにして一日も缺くべからず、之を缺けば忽ちに倒死する程必要なるものなれども、其度を過ごせば啻に身躰の營養とならざるのみならず、甚しきは却て生命を奪ふに至るの恐れなからず。

穀物肉類蔬菜等は身躰の食物也。學問は精神の食物也。身躰の食物が其度を過ごせば却て身躰の健康を傷ふと共に、精神の食物も其度を過ごせば同じく精神を傷はざるを得ず。

是れ極めて見易き道理なれども、世上往々身躰の食傷には深く注意して子女の過食を警めながら、子女の賢良を希望するの餘り、精神の食傷には注意することを忘れ、或は敎育は大切なるものなればとて、成るべく多く敎育を受けしむるを心掛け良き親のする事のやうに思ひ、學問は澤山する程ゑらき人になるが如くに信じ、只管學問の過食を奬勵するもの　さへなきにあらず。

然れども此くの如きは畢竟するに所謂其一を知て未だ其二を知らざるものとも申すべき歟。諺に神童は二十にして凡人に劣るといふも、人の早熟なるに乘じ、心身の釣合をも顧みず、多量の食物を送り容れ、胃の腑の力を用ゐ盡くして遂に消化の能力を失ひ、縱令食物を送らるゝことありとも、胃腸を其儘にて通り過ぎ、原形のまゝにて躰外に下痢し出され、身躰は爲に毫も營養せらるゝ所なきものとなりしに外ならず。獨り神童が二十にして凡人に劣るのみならず、滔々たる學者先生にして、多年多學の慣習は能く精神上の胃の腑を

擴大せしめて多量の學問を受け容るゝに係らず、之を消化するの力甚だ微弱にして往々に粒のまゝにて躰外に排洩するを免れざるものあり。或は多少消化の力あるものと雖、存外に之を以て身躰を營養するの力少なく、之を活用し出し、之を活事活物に應用するの効を見ざるもの亦なきにあらざる也。所謂飯を食ふの字引となり、學問の奴隷となり、所謂迂儒となるもの、皆多學の弊、精神上の胃病者にして、心力を受學に消費し盡くして復た才華の發揚に用ふべきものなく、教育の第一義たる自ら教育することをなさずして偏に人に教育せられたるに基せずんばあらず。

此の故に學問はもと天才を發暢せしむる爲のものなれども、其學問の仕樣次第によりて却て天才の發暢を妨ぐることなきにあらざるを見る。

かの極めて稚き小供に文字など教へ、或は學校より歸りたる後などに嚴しく復習を命ずる等、多くは所謂精神上の胃病者の所以にあらざるはなし。加之今の學校教育は實際に於て往々に此種の病者を作り易き傾きあり。英國の學者アルノルドが曾て、予は小童をヲッキスフオルドの學校に送らんより、寧ろウァンゲーメンスランド南洋中の英國に屬する一邊に送らんと思ふといひしも、都會の地にありて百事具備するより、僻陬の地不便の境に在る方、最も多く自ら樹立し自ら教育するの心を生ずべきが故にあらずや。

蓋し教育は才智を授くるものなりと思ふがそも〳〵の誤りなるべし。唯教育は才智を授くるものなりと思ふが故に、教育さへすればゑらくなると思ふなるべく、從て澤山に學問すれば澤山にゑらくなるやう思ふに至るならん乎。

勿論學問は人のゑらくなるを助成するものに相違なく、教育は人の才智を發暢せしむる補助を與ふるものに相違なし、唯其方法の苗の長ずるを欲して之を抽く

如くなるは、決して才智の發暢を補助する所以にもあらず、人のゑらくなるを助成する所以にもあらざる也。

敎育なるもの何處までも自ら敎育するを第一義とするものにして、恰も春雨の霑すが若く、艶陽の照らすが若く、滿地の春草をして砂を鑽て寸々萠出でしめざるべからず、春草の寸々萠出るは、自ら萠出る也。自ら雨露の水滴を分解して酸素を吸入し、以て自ら養ふ也。雨露は唯水滴を給するのみ、艶陽は唯其分解を補助するのみ、敎育も亦宜しく此くの如くならざるべからざる也。



牛

論説

産業上及經濟上に於ける女子の地位

G F 生

男女を問はず苟も人類として社會に生存せんと欲するものは必ず衣食住三者の助を借らざるべからず衣食住に必要なるもの經濟學者は之を名けて富と云ふ、富にして勞働の助を借らざるもの少なし故に吾人にして一日社會に生存すれば一日丈社會の富を消費し生産者の恩惠に浴せざるべからず。

然り人類は何人を問はず悉く一面に於ては消費者なるを以て他面に於て生産者たらざるべからず、然らずんば社會の權義上義務と云へる重荷を負ふて天國の門に走らざるべからず、之れ獨り道德上に於ける罪惡たる

のみならず蓋し又社會の厄介物なり。

生産者に二種あり一を積極的生産者と云ひ他を消極的生産者と云ふ、換言すれば直接物品の製造産出に從事するものと間接に其生産を助くるもの是なり、工業農業等は前者に屬し、敎育家美術家等は後者に屬す、思ふに消費經濟家も亦後者の範圍に落ちん乎。

婦女子も人類として社會に生存する以上は、又多少の生産をなさゞるべからず、生産をなさゞるべからずとせば積極的乎將消極的乎。

余嘗て地文學者に聞く獸類は赤道に近くに從つて其躰益大にして寒帶に適するもの少なく魚類は之に反し北海に入るに從つて益大なりと雖熱帶に趣くに從ひ、之に適するもの少なしと雖人類は到所繁殖せざる所なしと然り人類は如何なる氣候にも尙之に堪へ如何なる境遇にも之に處することを得べく從つて如何なる職業にも從事することを得べしと雖其尤も適當なる境遇に處して尤も適當なる職業を選ぶは獨り當人の幸福に止らずして又社會の幸福と云ふべし蓋し分業の元則なり。

女子は天性柔順にして身躰强壯ならず、所謂力役を以て男子と生産社會に驅逐することを難し、よし强壯にして男子よりも一頭角を抽んずるものありと雖習慣の之か制裁を施すありて所謂境遇之に適せざるを以て女子の生産社會上の地位は寧ろ消極的方面なりと云ふべし。

勿論積極的生産事業は獨り力役の必要に止まらず寧ろ心意的勞働は更に必要なりと雖積極的生産社會に於ける心意的勞働は企摸宏大、思想確固たらざるべからず而して女子は此點に於て男子と競爭する能はず故に女子は積極的生産社會に於ては力役上、心意的勞働上何れも男子に一着を輸するものと云ふべし。

然りと雖女子の性質は温順なるが故に物品を使用する

に當り至て丁重に、事を處するに當り思想綿密なり、丁重と綿密是れ實に消極的生產に欠くべからざるものなり就中消費經濟に於て然り故に女子の產業上の地位を求めば唯夫れ消費經濟乎。

消費經濟を別つて二とす一を國家の消費經濟と云ひ他を一家の消費經濟と云ふ、前者は之を名けて國家經濟即ち財政と云ひ後者は之を名けて家事經濟と云ふ、國は尙ほ家の如しと云ふと雖、其大なるの點に於て異なるのみならず其組織に於て全然趣きを異にせるあり從つて之を支配すべき法則も其の趣きを異にせざるべからず目下我國の法律習慣に從ふに女子にして國家の財政に容喙する能はざるのみならず、其之をなさんとするも亦容易の業にあらざるを以て女子か經濟上の地位を求めば唯家事經濟あるのみ。

家事經濟に於て尤も必要なるもの二あり曰く貯蓄曰く小資本の運用之れなり故に女子にして苟も自己の本分を知り自己の地位を知らば必ず先づ此二者を研究せざるべからず、是唯れ自己の便宜上より必要なるのみならず又女子の本分と云はざるべからず、由て吾人も亦他日諸氏と共に漸次之れが研究を施さんとす。



狩犬

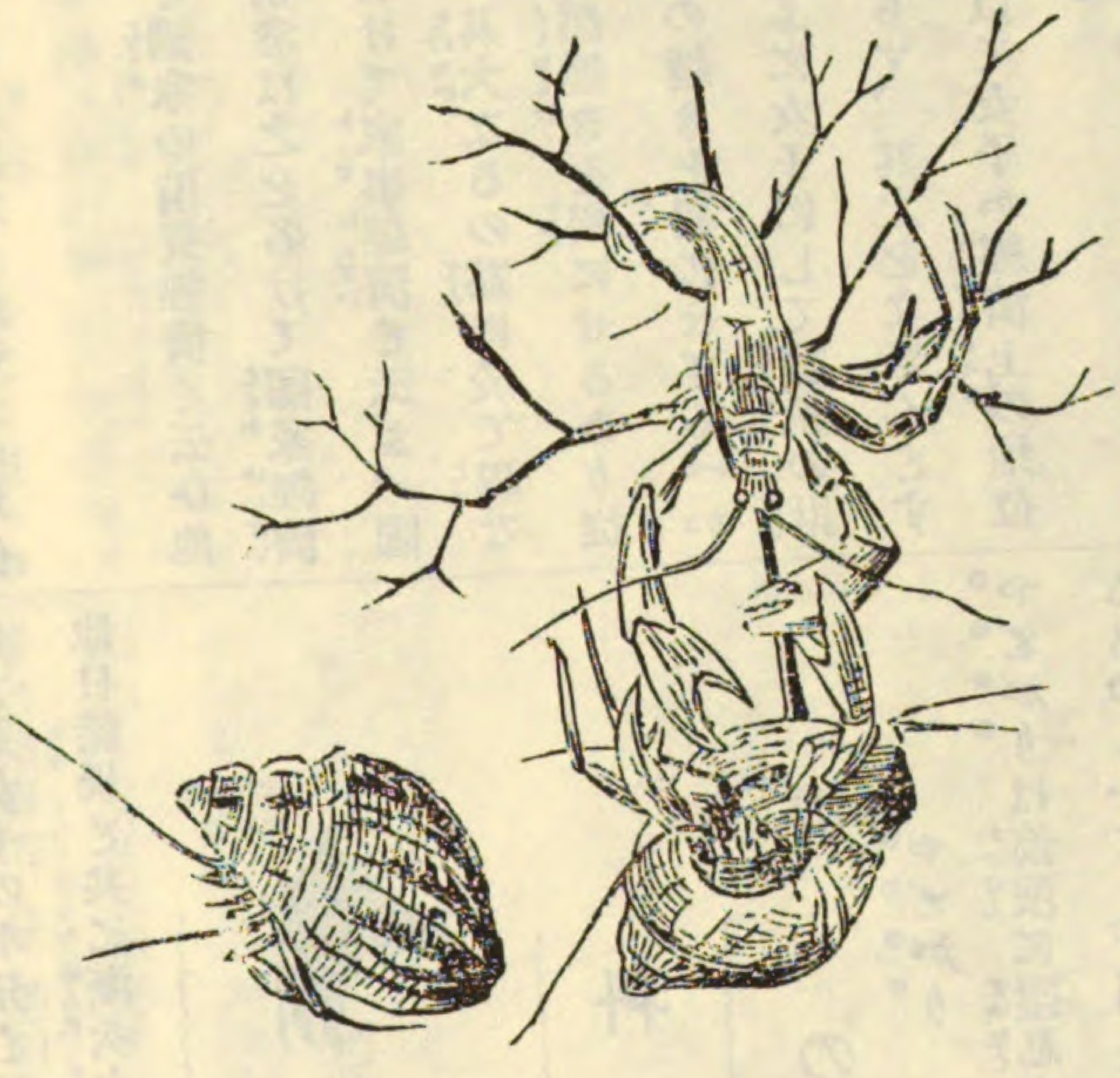
科學

海の世界

やどがり

●●●●やどがりは海濱に棲息する甲殼類の中にて最も奇異なるものゝ一なり。而して彼等が他の甲殼類と著しく相異せる點は、其頭部及胸部のみ厚き石灰質の殼皮に依て保護され、其他の部分は軟肉より成りて全く防御無

き故、容易に狂暴なる仲間の爲めに喰はるゝこと是なり。去れど彼等には自ら自營の本能あり、且つ已れの弱點を知り、その躰に適當なる空殼を求めて籠城するなり。而して彼等は空殼を求むるのみならず往々已の住居として格好なるものあれば前住者を攻撃して之を喰ひ而して後之を占領することすらあり。其食する時は巨大なる爪を殼の口より差出し、其歩行せんとする時は爪を以て最も已れに近き物躰を挾み前方に躰を引くなり、斯かる動作をなす時、彼等は毫も其弱部を表はすの必要なし。



海濱に近く住む讀者は、潮引き去りたる後、見渡す限りの砂上に無數の小さき殼の蠢々としてうごめくを見給ふべし、而して若し之に觸るゝとあれば忽ち彼等は其運動を停止するなり、讀者は容易に其動物のごうなにあらずしてやどがりなることを發見するを得ん。

西洋にてはやどがりを稱して兵蟹と云ふ之れ其性質鬪爭を好み常に同類相呑噬して其住家を爭ふを以てなり。彼等若し成長して住家の狹隘を感ずるに至れば、一層廣大なる家屋＝殼＝を求めん爲め、古巣を捨てゝ遠征に出掛るなり。最も面白ろく且つ可笑しきは

彼等の殼を搜索する模樣なりとす。先づ彼等は小心翼々四邊を見廻し、敵の影なきを見すまして大膽にも其城郭を出で、稍曲りたる其軟らかき腹部にて匍ひ行くなり。其空殼を發見するや、恰も吾等が住家を檢査する如く、其貝の隅々を檢察して後之に入るなり。去れど彼等は第一回の撰擇に於て滿足するは稀なり、數個の殼を歷見したる後恐ろしき危險に追跡せられ周章狼狽もとの古巣に逃げ歸ること多し。

彼等は其轉居するや必ず以前の住家より大なるものを撰び其構造及び色にも注意するなり、而して彼等は殆んど有らゆる種類の貝に住めども、其形は長くして螺線狀を爲せるものに限るが如し。

やどがりは性質甚だ臆病にして、極めて低微なる音響にも直に全身を殼中に隱くし其爪を以て殼の口を掩ひ滿身の力をこめて殼中に固着するなり、去れば諸君にして其四肢を以て彼等を引出さんとせば其全身は出でずして四肢のみ却て切れ取るゝを見ん。然れども斯く彼等は臆病なるにも係らず又非常なる貪食家にして、其途に當るものは何者をも喰はずんば置かず。己れより強き者來れば忽ち殼中に潛み、弱き者を見れば必ず喰ふなり。

若し同じ鉢の中に數多のやどがりを入れ置きて、彼等相互に平和に暮らすことを得ば、之れ其性質の温和なるにあらずして、勝利は敵の殼を出でたる時に非らずんば望むべからずてふ彼等の經驗に依て、互に嚴密に注意を怠たらざればなり。眞實やどがりは爭鬪好なり、二個のやどがり出遇ふ時は必ず互に爪を舉げ敵の弱點に乘ぜんと暫時挑み合ひたる後相方攻擊の無益なることを知り心ならずも交綏に退くなり。

やどがりの爭鬪は極めて激烈にして相方必ず負傷せずんば止まず其爪を張り斷へず其鋏を開閉し互に抱き合ひ上になり下になりて揉み合ふ樣中々盛なり、ゴッス

氏は彼等の喧嘩の激烈なるを記して曰く、一個のやどがり海濱を徊ひ行く際、己れより一層勝れて良き家屋を荷なひ行く仲間に出遇ひぬ。前のやどがり之を見るや忽ち走り依り其爪を以て敵の頭を挾み敵を砂上に引出し、彼は直に其古巣を捨てゝ新に掠奪せる家屋に入りぬと。人類は往々理由なき戰爭に血を流すとあれども、彼等は只住家の爲めに爭闘するなり。

玆に亦面白ろきは、海白頭翁(植蟲族)の好でやどがりと同居するとなり、白頭翁はやどがりの住める殻の上に自ら附着し、互に朋友となるなり、ゴッス氏は是等の二動物は相互的利害の關係を有するものなりと斷言せり。而して氏は倘此新住者に對するやどがりの動作を研究しぬ、夫はやどがりにして轉居する時は必ず其舊家屋より其親友なる白頭翁を大切に運び新たなる殻の尖端に之を附着するなり。而してやどがり先生は其大なる爪を以て輕く此寄生蟲を撫で、『朋友、靜にして緊かり附着ひて居り給へ』と唸くものゝ如し。

ロイド氏はポートランドの道路を築成する際、數ば此甲殻動物と寄生動物との關係の密接にして分離すべからざる利害の相互の間に存在することを實驗せり。氏は一個のやどがりが其近傍に一個恰好なる空殻を發見して、常に之に戀々し乍ら、其白頭翁を移すと出來ざる爲め終に志を果さず、矢張り舊屋に住むを見たりと云へり。

やどがりの或る一種は『マントル、アチモン』と同居し、やどがりの死するやアチモンは非常に衰弱し遂に久しからずしてやどがりの後を逐ふて死するも妙なり。

砂蠶類の一なる『アチリッド』はやどがりと同居して亦極めて睦しく棲息すると云ふ、或地方の漁夫は此蟲の特質を知るを以て餌食を要する時はやどがりを碎きて此蟲を得ると云ふ。

やどがりは自ら殻中に棲息するに不適當なる時は海綿

の中に住み或は浮石の孔にも住むとあり、千八百六十一年巴里の動物園に於て其殼に白頭翁を有せる一個のやどがりは他の殼に移る毎に白頭翁を運びたりと云ふ。然れども此寄生動物に就ては二三の疑問あり。即ち、彼等は何を食するか、或はやどがりの排泄物に依て生活するか、又寄生動物の分泌する激しき溶解力を有せる液躰は何故にやどがりの軟弱なる部分を傷けざるか、此等は尙學者間の疑問として存するなり。



又やどがりの一種にして平らたき小石を脊負ふもの、扁平なる貝殼を楯の如く負ひて持ち行くものあり。

『ピンノサース、ヴエタラム』(圖)と稱する蟹は其形豌豆の如く全身薔薇色にして極めて美麗なる小動物なり。彼は大低牡蠣の殼中に住み、盲目なる牡蠣の爲めに眼の代用をなし好意を表すと云ふ。若し危嶮の迫ることあれば客は主人の袖を引きて注意し牡蠣は直に其二枚の殼を閉づ、或は小魚の牡蠣の殼中に入るものある時は、蟹は牡蠣をつゝき其殼を閉ざゝしむ。斯くて小魚は嚢中の鼠主客二個の食餌となるなり。讀者或は此事實に疑惑を抱くものあらば其は却て蟹に自營の本能あることを知らざるの笑を招くに過ぎざるべし。

此小蟹は啻に牡蠣の殼中に捿息するのみならず、淡菜其他の二枚殼貝の貝類と同居するなり、トムソン氏は愛蘭土の海濱に於て十八個の貝を撿して貝中平均十五個位の小蟹を有することを發見せり。

豌豆蟹は利己主義にあらず、常に其同住者に利益を分つを以て、主人なる貝は久しからずして此新來の小殖民者を愛するに至ると云ふ。記して此に至り吾人は自然の調和の美妙不思議なるを感ずること深し、實に天地間無生物の外一として全く孤立せる者はあらず、生命の法則は連鎖の如く互に相關連して一瞬も相分離する

能はざるなり。

史談

蟹

俳女その

其の字生

王朝の古には、紫清の二人を始めとし、多くの名媛一時にあらはれ、各々其特得の長をふるふて、或は艶なる、櫻の如く、又は粹なる梅の如く、大ひに一代の盛を粧ほひ、ながく餘光を傳へたりき、千歳の下、吾人はるかに、想像して、いよいよ慕ひ、いよいよ感ず。事はこれ、大ひに似たり。德川の盛世、元祿の年に當りて、才女四人、前後にあらはれ、其玉の如き思ひ、其の花の如き心、これを十七字の俳句に弄し、縱横自在、更に撓まず、然かも亦、天成の麗質一つも損せず、おのづからこれ美にして優しく、實に感ずべきもの、賞すべきもの、各々百歳の後につたへて、ますます想慕の念を增さしむ、後人すなはち、ならべ稱し、彼等を元祿の四俳女といふ。

いふ心は、王朝の名媛、ともに〳〵併せつたへて、梨壺の五才女といふに等し。されば又、其五才女をいふが如く、まさに嘖々として世につたへらるべかりしを、其實いさゝか然らざるもの、何が故にそれ然かありし。

これ他なし。五才女の歌ひしところ、咏ぜしところ、いはゆる御國風の三十一文字、漸々高尚なる、和歌になりしも、四俳女が、歌ひしところ、咏ぜしところ、やゝ俗に近き俳句なりしが故にしてこれ然かありしこ

その一つ、然して又、五才女の身分、いづれも共にやんごとなき、いはゆる雲の上人なりしに、四俳女はいづれも皆、坊間市井の賤しき身なりし、これ然かありしことの一つ、二つの原因、そのことの素となりて、王朝江戸の兩時代、相對峙してともにともに、等しくたゝゆらるべかりしを、實際然らずして、一つはひろくたゝへられ、一つは僅かに、俳人の間にのみたゝへられたる、これにつけても、人生いたづらに、其名と位置とに眩せられ、直ちに其實を洞見し能はざるもの、如何にしても口惜しく、如何にしてもうらめしゝ。

今や、時來りて、俳句俳諧の光いよいよ現はれ、俳士俳人の名の、ますますひろく傳へらるゝ、吾人俳壇にあそぶもの、大ひに喜ぶところなり。さて其の今の世にいはゆる、元祿の四俳女とは誰々なるぞ。

曰はく、『朝がほに、釣瓶とられて、もらひ水』。村翁野嫗もこれを知る、加賀の千代女なり。

曰はく『井戸ばたの、櫻あぶなし、酒のゑひ』。春風駘蕩、百樹花爛熳たるが中に、秋色櫻とて、筐の古木、今猶ほ東臺の山に存す、照降町の秋色女なり。

曰はく『草原に、おしやすておく、露のたま』。太守公の令嗣、譽れは一身の上にあまりし、丹波の捨女、田氏が子なり。

曰はく、伊勢松坂の人、度會何某が、まなむすめ、園女なり。

四俳女、いづれも共に特色あり。千代女はかすみをもるゝ櫻の如く。秋色は即ち名詮自稱、秋の野に、色おのづからいとやさしき、撫子の花の如く、ゆら〳〵と風にのびて、やさしう咲き出でたる、なか〳〵にくねりならはぬ、あどけなき處あり。捨女また、水に影をやどしつる、燕子花の如く。うつくしき中に、多少の勢ありて、りんと力の入りたるものあり。然して、其

最後、度會園女に至りては、垣根に咲ける、紫陽花のそれにもいとよく似て、姿强くして心おとなしく、その俳諧の虛實にかなへる、日ごと夜ごとに、花の色のうつりかはりて一つならざるが如き中に、終に閑雅の趣を、たゞいさゝかも失はざる、ことに取り出でゝいふべきなり。

四俳女の中、加賀の千代も、照降町の秋色も、又は丹波の田氏捨女も、前後家庭雜誌の史談欄にて、我れ夙とに皆紹介せり、されば親愛なる讀者諸兄姉、あるひはこれを記したまはん。

今またこゝに殘る一人、度會園女がことをいふ。まことに其好む處のものに偏して、いつもいつも珍らしからぬ、俳女などをと、或は眉うちひそめたまはんや、いともふかく恐るといへども、たゞそのいはゆる四女たるものを、これにて完からしめんため、そを顧みで斯くつたふ。

願くば讀者、さきに、三女が小傳、余がものしつるところのものを、一讀したまひつるが如きさちをもて、又々今も讀みたまはんこと、今紙にのぞみて願ぎまつる。

園女は、承應二年三月を以て、生れたり。まだ振分髮の頃ほひより、才氣世にすぐれておとなしく、父に敎へられ、母に導かれて、天成の美質いよ〱美に、末賴母しく見えたりき。

十二三歲の頃ほひより、同國山田の產、杉本光貞といふ人の妻にして、博學多才の譽れ四隣に高き、美津女といへるに師事なして、和歌敷島の道をたどり、大ひに得たる處ありき。

《美津女が名は、諸兄姉つとに知りたまはん、今更いふまでもなきことなり、其うるはしき長短歌は、さま〲の集に遺り、且つ其うるはしき花の如き文は、平家物語を縮めて書ける《Condensed》月の行方によりて

見るべし。かつていづれの雑誌にや、三宅花園女史、この書のことについていと詳しく、かたりたまひしてとのありし。月の行方は、史籍集覽の中にも、をさめてあり》

其後傳手を得て芭蕉に師事し、これより俳諧に思ひを馳す。

生得の風流、苦心によりていよいよ精に、間もなく同門の間に知られぬ。芭蕉沒して後は、更に其角に點を乞へり。

一代の吟咏、積んで其數多き中に。

袖かけて折らさじ鹿の袋角

二王にもより添ふ蔦の茂りかな

小原女の野分にむかふ抱へ帶

鼻紙の間にしほむ菫かな

燕や巣の中せまき私語

負ふた子に髮なぶらるゝ暑さかな

衣がへ自から織らぬ罪ふかし

あるだけの伊達しつくして紙衣かな

色あひも僅かに春の夜明かな

玉笹の二ふし三節清水かな

夜嵐や太閤様の櫻かり

花の前に顔はづかしや旅衣

など、これ其尤なるものにして、自づからやさしきところ、到底男子たるものゝ、誰とてもなし能はざるものなり。

年二十三にして、岡西惟中といふに嫁げり。

惟中は、もと因幡の人なり、故ありて備前岡山に住し、後又た浪華に移り住む、初め杉田望一に學び、後また西山宗因に從ひ、俳名一時に甚だ高く、一時軒、又は閑々堂と號す。頗る多能の人にして、醫術に精しく、儒道に達し、和歌に巧みに、然して尤も書を能くせり。琴瑟尤も相和して、松蘿の契り色ふかく、一男二女を

擧げたりけり。

元祿五年、惟中五十四歳を以て沒せし後は、園女未亡の操を守る、まことに誠に堅くして、爾後かつて一度も、男子と並び座せしことなし、たゞ世の常のことに限らず、風雅風流のまとゐ、俳諧連座の席といへども、決してならび座せしことなし、貞操斯の如きもの、園女を除きて誰かある、誠に日本婦女の鑑なり。

晩年、佛道に入りて、雲虎和尚に參禪せり。幽玄なる禪理、其悟道せしことの如きは、和尚に答へし書によりて、これをうかゞひ知るに足る、

來書の趣き拜見仕候、眞を求めず、妄を求めざる、これ大道の根源にして、誰もかれも存する所、憚りながら珍からず候、一心源頭に上りての所作、柳は綠花は紅ゐ、その儘にして常に句をいひ、歌を綴りて遊び申候ことに候、無益の口業なれば、一切經も無益に候、法臭きことは嫌ひにて、我が平日の行ひは、念佛と句と、歌となり、極樂へ行はよし、地獄へ落つるは目出度し、

誰か見ん、誰か知るべき、有にあらず、
無きにもあらぬ、法のともし火

其才氣、すべて斯の如くなりし。

享保十一年四月二十日、

秋の月、春の曙、見し空は、
夢か、うつゝか、南無阿彌陀佛

辭世の一首、あとに殘し、享年六十三を以て、眠るが如く、彼女は逝けり。

春去り、秋來り、星霜こゝに二百餘年、いうにやさしく、然も亦、凛として犯しがたき、彼女のたまは、今猶ほ、青苔の下に眠れり、深川靈巖寺中、念佛堂の裏手なる、青苔色ふかき下に眠れり、同好の人、杖を江東に引くことあれば、便路行きて彼女を吊らへ。



猫

文藝

田園雜興（三）

不二行者

蟻

田園の閑生活には蟻もまた伴侶として興味あり風情あり。この小さき昆蟲にさへ眞宰の偉大なる造化の、微妙に賦與られたるを視るべし。

春風緩く吹いて桃櫻の爛熳熾ゆるが如く、人の心も浮くばかり駘蕩の頃より、かれ蟻ども、亦冬籠の關門を啓き、廣き此世に現はれ來る。庭石の際、軒の陰、緣の下さては樹株の根などに、細かに淘げたる砂を圓く盛りたる皆かれ等の巢穴なり。

彼等同族數多あり、最も大にして黑きあり、行爲忙たゞしく人を恐れ興に乘らず、餌もまた共同に依りて運ばず。次に大にして紫黑色なるあり、性憶病にしてさも興薄し。小にして蒼黑きあり、輕躁に敏捷なれど容態趣致無し。赤蟻は躰小に色美しく剛柔相兼ね、一致協力能く働き能く勉め、應に蟻群の代表たるべきものなるべし。春日暄和軒端に陽炎の燃ゆる時、かれ等は各其巢を出で丶東に尋ね西に搜りそが食餌を求むるに忙はし。

甘味に附くと人の上に譬喩ある如く、甘味はかれ等の最上好物なり。菓子なんどの細屑の折にふれて見出されたらん時は、宛然戰場の勇士が敵の首をとりたらん樣に各自分捕つて、喘ぎ／＼往くも興あり。

藹々なる春雨の輕雷の一聲に名殘無く晴れたる日、桃櫻の麗はしきを眺めつ丶庭を逍遥ふに、雨後の潦水

端なくも蟻群の城郭近く張り溢れたり。片々たる落花の水に浮きたるに數箇の蟻どもとりつきたり。此はかれ等にとりては、烟水渺々たるべき大洪水にて、そが落花の一片はノアの船とやすべき、花の筏にとりつきかねて身を水にまかせ漂ふもあり、さながらぬき手を切つて泳ぐもあり、はや落花の舟を岸に下りたちて前途を望みて躊躇ふもあり、岸に上るまゝに急ぎ城郭指してゆくもあり、漂ひつきたるものに何事か偶語ふもあり。千態萬狀少許の春雨の蟻群に如何なる驚惶を與へたるか、はたかれ等が如何に人の如く行動ふかを觀るべし。

春より夏かけて「彼」の庭は、樹梢枝葉の別なく蜘蛛の巣縱横にかけわたされ、剩さへ開閉稀なる柴門の眞中に太く粘着たる網を張り、逞しき大入道のやうなる蜘蛛、門柱の朽ちし小陰に潜み、獲物來りかゝるとき躍り出てゝそを捕ふ。全身茶褐色にして蒼黒く、むくつけき毛髮生ひ、圓らかなる眼をすえ肢を張りたるは、さながら或魔物の化身かと覺えて、老猾佞猛なる或ものを想ひ出されて容し難かりしかば、やがて蜘蛛どのは中天の棲居より大地の庭上に壓し据えられ、石もてしかと覊されぬ。こは蟻群の餌に與へんとてなり。

かくて一個の赤蟻は、探索巡撿の途次此大なる怪物を見出し、先づ吻もて仔細に按撿しさてその周圍を一周し、一度去てまた返り、按撿を繰返したる後、巢の方指して行く。路は頗る遙なり、彼方此方に迂回し屈曲し漸く巢の口に辿りつきつ、折しもその伴侶に逢ふ、吻もて互に揖する如く偶語ふ。相分れてかれは穴に入り伴侶は先づ道をもとむ。程もあらせず前者なるべきが先導となりて夥多しき蟻軍は出で來れり、整々として行伍亂れず、絡繹として隊列を成す、十數の間毎に必ず一箇の頭目あり、躰大にして威容あり、行動の順序あるは名將の軍令に從ふ兵士の如く、赤き肉甲の堅

固をよろふたるは甲冑着けたる勇卒に似たらんか。路次誤らず、蜘蛛の全身は、やがて一簇の紅雲に蔽はれぬ。なほ生氣に充てる魔王は肢を張りて縱橫に敵冠を跳ね飛ばすものから、かれ等はおめず臆せず、隨て拂へば隨つて取りつき、且投げられ且縋り、竟に魔王の精根疲きて生氣無きに至れば、巧微なるかれ等の集合力は殆ど蠶豆よりも大なる魔王を搖し運び去る、天王の御輿を群童の捧ぐる如く、大江山の鬼の首を獵夫の擔ふに髣髴たり。人間の耳には聽くこと難き細小なる凱歌を擧ぐる態に、蔟々として動き進み、再び路を違へで巢窟近く着きたりける。

魔王の躰大きくて穴に入れらるべくもあらねば、一群は分れて巢窟口を擴げ、一群は魔王の肉の咬み得るかぎりを採りて運ぶ。その巢口を擴ぐるの樣は一層驚ろかるべきものあり、かれ等各巢口の細沙を口に咬へて外に搢き來る。かれ等の口は斧となり鉞となり、鍬となり鶴嘴となり、總ての器具に利用ゐられつゝ、さながら隧道を作る工夫の如く動くなり。

幾何の時を經て、魔王の軀は幾分小さくなり、穴の口は廣くせられて、やがて大なる獲物は呑まるゝ如くにかれ等の棲居に隱れ了んぬ。斯くしてまた忙はしくその獲物を搜索すること依然たるかれ等を視る。

かれ等は時に他の群と相鬪ふことあり、そは獲物を同時に發見し、期せずして大群の衝突せる折なり。かゝる際にもまた、蒼黑きものも黑く輕躁なるものはた紫黑色のものも赤蟻の一致協力よく耐へよく防ぐに及ばば、大抵勝を制せらる。元より赤群の強きにはあらず單吻相接すれば赤蟻の犧牲多けれど、そのよく力を協せて長く拒ぎ精力の絕えざるに因りて、最後に獲物はかれ等に歸するなりけり。

かれ等はまた天候を豫視す。軒下などの潛匿に便あるものはしかあらねど、石甃の隙など狹きところにある

ものは、霖雨の前陸續として屋ある方に移る、連日の雨稍晴れむとしてなほ人の卜ひ得ざるに、かれ等はまた陸續として舊巢に返る。此移轉の折は各個吻に微眇なる白き粒を噛らす、實にこれはかれ等蟻群の子孫たり繼續たるべき卵なり。

あはれ此小さき蟲群も眞宰の生物なりけり。邪氣なき童見の慰樂となるのみならで、髭鬚むくつけくなりたる大人にも、怎に興味あるかを視む。

一夜の雨

桐酒舍女史

春雨のふりける夜音つるゝ友もあらねは、とくふしとにいりしか頭ら重き心地して、いもねさりけるに、遠くきしる小車の音も、やゝ更行て鼠のあるゝ音のみ近く聞ゆれは、晝の程人よりおくられし唐菓子や得られんなと、いやしうも心もとなきに、え堪へて枕かいやりつゝ、おなかま汝れも大國主の神に仕へて、忠とたゝへられし昔をわすれすてあれと、いひしに鼠らは打驚きて、我を見かへりしかちう／＼と鳴て、おのかまに／＼かくれ去りぬさすかに、忠といふ事はわすれさるよとやと、打ほゝゑまるゝにつけても、天津御神の御めくみをうけし民草は何にまれ世になし得る事なくてやはと、思ひの露のこほるゝをあらたへの、袖もて拂へはあやしうもかをりぬ、我ものなからあうなつかしと、打かへし見れとゆかしきいろもあらねは、いよゝいふかしと彼方此方見かへれは、とはいぬる日、春園のあるしか難波津の昔しのへよとて、折來ぬる梅なり起ふしに愛てはやしゝものから、袖にも香をうつしかくかをれるものをとて

　　世にかをることとしなき身は花瓶の
　　　一枝の梅もうらやまれつゝ

と口すさひて志はしきぬひきかつくほどに、いつしかまどろみけむ、とく起たまへといふ聲の耳にいるに、驚き覺れは近きにすめる甥頁彦なりけり、いかなれはかくはやう來しぞと、問ふもまたて、叔母よ、わなみも今日よりさる方に、つかふる身となりぬ、よろこはせたまへと、いひさして嬉しけに出行、姿を見やれは今朝しも、大人になしゝか肩のあたりひろやかに、なりしをいかめしう着なしたるも、をかしいさことほきせむとて

十あまりまた七とせの若松も
千とせさかえむ根さし見えける

雨もなこりなふ晴渡りて、旭と共に例の梅の高く匂へるに、かしらもとみにかるうなりぬ

憂かりける夢さましてし梅か香は
おのか心の朝きよめかも



畑公

談叢

狐のレイナード(三)

勝間禪夢

此時狐はブルインが鼻と足を丸太の裂目に挾まれ、藻搔き苦しむ躰を小氣味よげに打見遣り、

これでも、まだ貴樣は蜜が欲しいか、さう苦しい思をするのも皆な貴樣の貪欲根性から起つた事だ自業自得と諦めて泣くとも吼るとも勝手にしなせい。

と悪々しげに嘲笑ひ、悠々家路をさして歸つて行きました。

苦しさ、痛さにブルインの吼ゆる聲が絶え／＼に、悲しく響いて、樵夫パステヒルが樂しき夢を破つた。驚き醒めて跳ね起きたパステヒルは、慌てゝ窓から差覗いて、

ヤー、これやあ大變、何か變事が出來たわい。

と呟き、程なく小舎を飛び出し近所を駈け廻ぐつて午睡の人々を叩き起し

オイ、熊だよ、熊だよ、大きな熊が俺の庭に倒れて居やすから、皆んなの衆早く來て見なせい。



と叫びました、すると此聲を聞きつけた人々、熊だと言はれて吃驚仰天、手あたり次第に柄物を携へ、男も女も口々に

どれ退治してやるべい。

と言つて、斧や玄能を提げたもあれば、鍬や熊手を擔いだ人もあつた、又學校の先生（原書は僧とあれどわざと學校の先生と譯す）も太いステッキを持ち出し、そして其家の下女は庖丁眞向に振翳して飛んで來ました、此の大勢の人が皆んな熊の傍に寄つて集つて、有る丈の力を出し面白半分に、突いたり打つたり擲いたり、それは／＼苛い目に逢はしました。

その内に熊がとう／＼苦しまぎれに丸太から己の鼻と足を捩ぢ拔いて飛び上つた、これを見たもの皆驚いて折角持つて來た道具も其處に打捨放にして、我れ勝に押合ひ逼し合ひ逃げ出して仕舞つた、庖丁を持つて一番後に成つた下女が、その時何うしてか不意に河の中に轉げ落ちました。

大變、大變、皆さん待つて、お三が死んぢまうか
ら、早く助けて遣つて下さいよう。
と泣きさうな聲で學校の先生が叫び出した。
そこで衆人立ち戻り即坐の浮袋に樽を投げて遣りました、お三はそれに確かりがぢり付いて間もなく無事に深い海ではたいが冷たい淵から此方に上陸する事が出來て、ブル〱五躰を慄はし家の方は飛んで行きました。



此の騒動の有つた爲め、誰も皆熊の事には氣付かず仕舞つたものですから、彼は靜かに起つて身を河に滑らし、流に沿ふて泳いで參りました。
その後四日程經ちて、苦しさうに傷だらけの鼻に細い息を吐いて、弱はり衰へ痛さうに、毛の擦り剝けた足で、一運毎に呻いては休む熊のブルイン、やう〱獣王の宮殿に歸つて來た、宮門を入るや否や卒然彼は其處の隅に積み重ねて在つた枯草の上に倒れて仕舞ひ、さもあはれげに唸つて居た、そして數多の朋友に向ひ彼が蒙むつた危難の事實を語つて、何卒味方になつて我が讐敵を打ち下されと只管賴みました。



獸王の獅子は熊から惡むべきレイナードの所行を聞いた時は、非常に腹を立てゝ、若しも此儘打捨て置いたなら益〱增長して如何なる事を仕でかすかも計られない、且つは己の威厳に拘はる事なれば、直に最後の嚴刑を施さうとも思つたが、如何に出席を拒むものといつても、罪に

行ふ前には三度召喚しなければならないといふのが此の國の法律であるのに、レイナードに向つては唯一度召喚を發した許だから、尚ほ再び誰かを送つて見ての後に罪を決めなければならない、だが誰もブルインの事に懲りて、敢て第二の使者に立たうとするものが無い、そこで仕方無く獸王は遂に機智に富んだ猫のヒンズを擇ぶことにしました。



畏まつたと答へ出立しようとする猫に向ひ、獸王は注意を與へて

　貴樣も、氣を附けないと不可ないぞ、レイナードは中々狡猾だから、少しでも油斷をすると失敗て仕舞うが、善いか。

と戒めた、ヒンズは尻尾を高く直立てゝ

ハイ承知仕りました、大丈夫です。

と答へ、かゝる大役を受けた身の面目を人に誇り、道々種々の臭氣を嗅ぎ分けながら、狐の城砦目掛けて驅け行きました。



城砦にヒンズが到着したのは、日も暮合の淋しい頃で丁度その時レイナードは庭園の椅子に持たれ、暮色の美しい四邊の景色を眺めて居ましたが、ヒンズの來たのを見て椅子より立ち上り、丁寧に腰を屈め

ヤー、ヒンズ君よく御出でなすつた、まあ此處に御掛けなさい、貴獸が入らしつた位だから定めて芽出度い御用が有るのでしやう。

とニコ〱笑つて言つた、ヒンズは此の時嚴然となつた

　獸王が貴下に再び出席するやうにと申されますから、兎も角法廷に出て辨解をなすつた方が得策でしやう。

と言へば、レイナードはさも驚いたらしい樣子を態と作つて

　一躰何ですか、私に罪でも有るといふんですが、怪しからん事を申されます、私にそんな覺は毛頭ない、これは怪しからん、多分何かの間違でしやう、オヽ解かつた、そりや平生私を怨んでる動物の讒言に差違ありません、何も暗い處は無いから屹度明朝は早く參りましやう、とんだ事で貴下にまで御苦勞をかけて濟みません、今夜は最早遲う御坐いますから、どうぞ宅に御一泊なさい。

と言つた、ヒンズは窃かに獸王の戒めたは此處の事だと氣が付いて

　まだ私は眠くありませんから、これで御暇致します。

と言つて歸らんとしかゝる、狐は急に押止めて

まあ、善いではありませんか、まだ夕飯前で入らしやるでしやう、何も御坐いませんが手製の蜜でも上がつてからになさい。

猫のヒンズはレイナードの言葉に益不審を抱き

否、何も御構ひなさいますな、有難う御坐いますが、蜜はブルインが澤山戴いて閉口したそうですから、私にはどうぞ御免を願ひます。

と斷つた。

　ブルイン君ですか、あの獸は苛い人です、自分の

過を隱さうと思つて皆んな私に罪を塗付けたのです過日あの獸が來ますと卒然庭へ下りて行つて蜜を喰べやうとしますから、私は止めたのです、だのに貪欲根性なので、それも聞き入れないで、とうとうあんな酷い目に逢つたのです、そりやさうと貴下は嘸御疲れでしやうが、御一所にちつと散歩ましやうか。と飽まで巧の口先に己が非を飾つて述べ立てました、それより二頭は打連れ立つて、庭を過ぎ黒塗塀の廻し

圖



てある農家の物置小舎に近寄つた時、レイナードは急にヒンズを振返へり

私は度々此處へ稼業に來ますが、此の中は鼠の糞だらけです。

と言へば、ヒンズは

鼠が居ますと、何處にです。

と尻尾の端から口髯の根本まで震はして言つた。

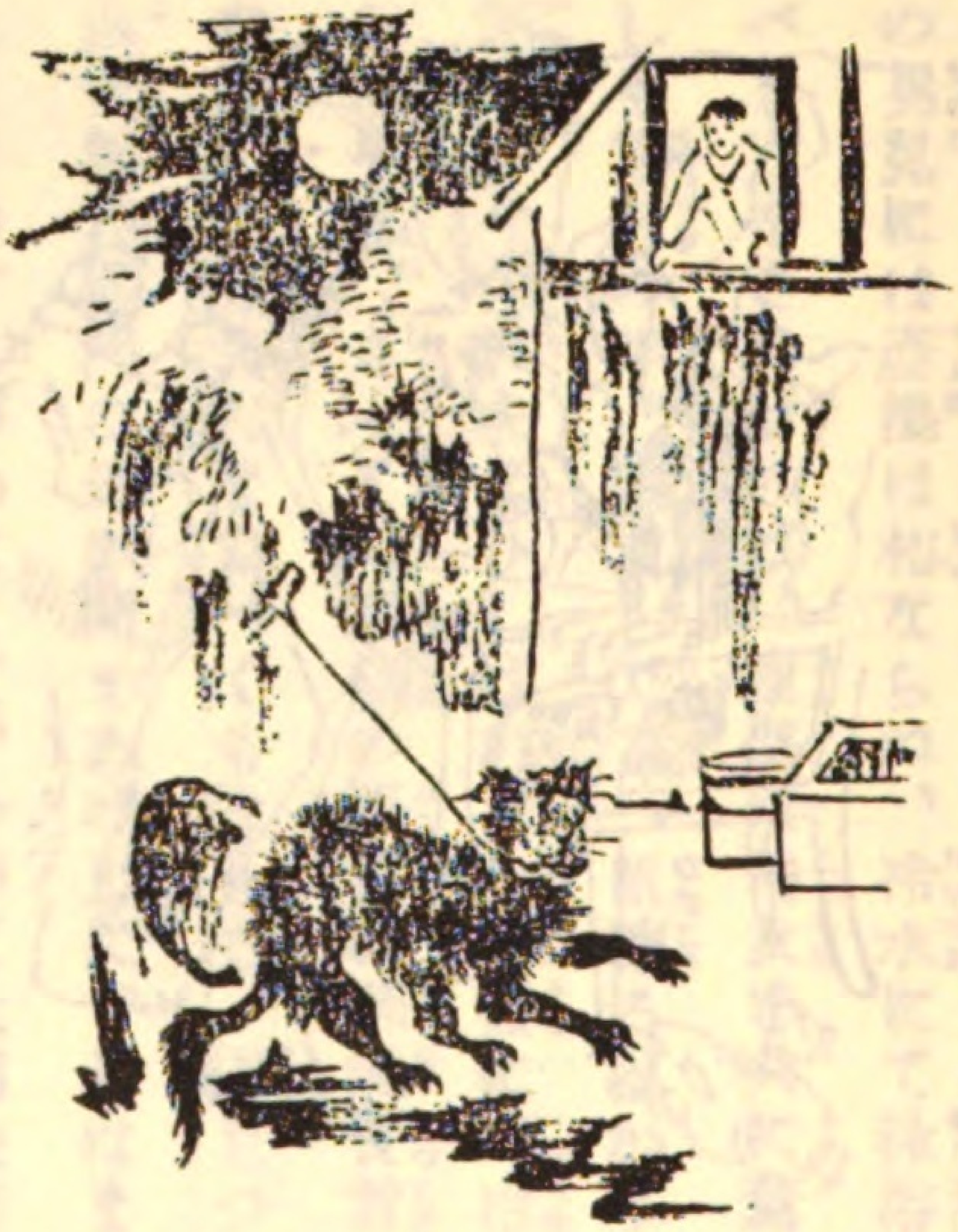
若し貴下が此の中に這入つて御覽なさりたいなら教へて上げましやうが、入口の穴はそこに在るんです。

といふ狐の言葉を、欺かるゝとは知らないで獸王よりの命令も悉皆忘れて仕舞ひ、罠の掛けてある恐ろしい穴の中に首を銜込みました。



此の穴は此家の主人が、度々徒に來るレイナードを惡み、今度はこれで懲らして與れうと罠を仕掛て置いたのです。

ヒンズは罠の爲めに段々苦しく首が緊まつて來たものですから、悲しさうに聲張上げて救を求めました、レイナードは穴の外より覗き込んで



嘸ぞ善い心持でしやう、鼠は澤山居りますか、どうも貴下は愉快に御歌ひですね、まあ御緩り御浮れなさい、左樣なら御休みなさい。

と言ひすて、己れは家に歸へつて暖かな寢床に這入つた。

ヒンズの苦む呻聲に夢醒された此家の主人、怪みながら床を跳ね起き、窓より此の躰を見て驚き且つ喜び、妻と我が子を呼び起こして、己は熊手を携へ、手燭を取つて妻に渡し、息子にステッキを握らせて物置の洞穴に衝き進み、親子共々そこに黒く動いてるものを目當に散々打ち擲つた。



ヒンズは息子の持つた、ステッキに強く擊たれて、片目飛び出だ苦痛まぎれ、死力を出して繩を食ひ切り、飛び上るかと見る間に主人の顔に嚙み付いた、此の物

音を聞きつけ、起きて來た下部の男、それと見るや驚き慌て、主人を助け起こし、やう／＼寢床に連れ行きました、その隙にヒンズは壁を飛び越え、一目散に逃け去つて仕舞つた。

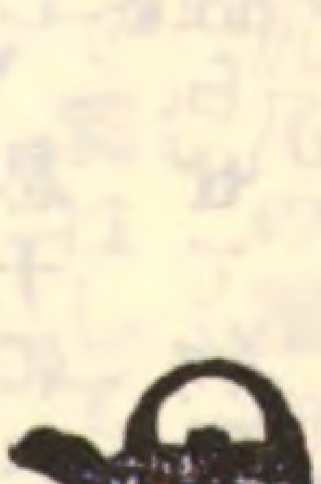


その次の晩法廷の門が開かれた時、泥だらけの尻尾を引ずつて悲しく跟く々と歩いて來たのは猫のヒンズで、躰は一面に掻き抓られて、目は片方飛び出し、顔には幾ヶ所となく傷を負はされ、そして血が凝結つて居る彼は法廷の門を潛るや否や

レイナード奴。

と叫びざま其處に倒れて仕舞ひました。

その内に朋友が寄つて來て、躰を奇麗に甜めて遣つたり、顔を洗つてやつたり、又乳や肉を勸めて種々介抱した、そこで少し快方に成つた時、ヒンズは災難の事情を巨細親切の友に話しました。





銚子

江川英武の產水

さくら

幕府代官にて、伊豆韮山に治せし江川太郎衛門は、性剛强、當時代官中の俊傑にて、はた近代の一人物なり。「十九人中狂縣令、一千餘年舊家孫」。と詠じたるの詩を視ても、その豪快の意氣を憶ふべきなり。

太郎左衛門、長子某ありしが多病にして夭せり。今韮山に在て鄕黨子弟の敎育に從ふ江川英武子は其次子なり、英武子生るゝや、産婆急ぎ太郎左衛門に報じ、男兒出生の佳瑞を祝す、太郎左衛門さして喜べる氣色もなく、出生の男兒には産湯は相ならぬ、冷水にて沐浴しつかはすべしと申されければ、産婆は侍女と共に驚き呆れ、折しも霜月の半、重衣してさへ肌凍るばかりの寒さに、怎でか今生れたまひしばかりの若樣に、冷き水をあてらるべき、さりとて殿樣の平素の御氣質言葉返し申したりとて聽したまふべくもなしと、困じつゝも、此事由太郎左衛門の母に聞えあげしに、そはまた無殘なることを申すものかなとて、やがて太郎左衛門の室に至り、男兒生れたりといふは何よりも慶事なり、さるに産湯はならぬとは如何なる存寄にや、かゝる寒さ、世に水をつかはす無慈悲の親あるべきと言はれけるに、太郎左衛門、さん候某とても男兒を擧げて喜ばしく候へど、總じて今天下騷がしき世の中、武家の子は強く健固ならでは、役にたち申さず且は江川の家の繼統者とも相成らず、前の悴のやうにては世に出で候とも蟲介同樣生効は無きものにて候かし、此度生れし男兒水を浴はせたるより萬一其まゝ死去せ候やうの弱きものならば、湯を浴はせたりとて生長の後何の役にもたち申すまじ、母人の仰には候へど太郎左衛門の子は太郎左衛門の意に御任せあるべく願はしく候なりと、意に聽きいれで、さては嬰兒は産湯ならぬ寒中の水に浴られ、太郎左衛門の産水と今に傳へらるゝ話柄なり。

こは元より今日に應用すべくもあらぬ事柄なれど、古の英雄豪傑のその子に於ける敎育法は、多くはかゝる事にてありしなり。子に對してあまりにあまく牛の子を舐め殺すといひけんやうなるも、また好ましき事にはあらじ。今の世の壯者の弱々しき多きには太郎左衛

門の教育法も効あるべしよと或老人の語りき。



象

小説

かの兒

池田再來（一）

北上のある渡し場をこなたより向岸に渡つてしまつて、それより堤防までの間を我行く足元より胡蝶一つが飛び立ちてひらり〱と後になり前になり路傍の花を尋ねて伴ふて行く、立止りて飛び行くまゝをしばらく見遣るにだら〱となりかゝつた道の片脇の今を盛り頃なる野薔薇にチョッととまりて風もそよがぬ日當りにその芳ばしき香仲々に見棄てがたくてか飛立たず歩みを徐ろになして殊更音を低くめてそこを行過す時に餘念なげなるその態を薔薇の一輪の上に見たる我は行くべき身をも忘れてしばらくはまた佇んで送りくる薫香を我も餘念なく嗅んだ。

この時そよ〱と通ふて來た風のその翼にふるゝと見ゆるや忽ち驚き飛んで我袖をかすめ堤の上に高く一ゆりゆつて再び下るとゝもにその姿は消えてしまつた我も後くれじと驅け上りて長堤の上に一躍土をふめば前面忽ち開けて湖碧くかなたの山の裾まで擴がりてある、濃い淡い森が岸なりに出つ引込みつしてその間だ間だには多少の屋根が見えた、かしこは我行くべき村である。

胡蝶の影は跡なく消えて今は我一人懷かしきかの森の方へ堤を傳ふて行く、長堤は河に沿ふて何所までもそ

續く志たが往還は森の間へとだらくと下つてまた堤から別れたこれからさきの堤は夏ごとに小笹、灌木、薄などがのびくと繁るのが常である、我は往還に添ふてまだらなる木立の間に這入つた。

村の這入り口には大きなる供養石が建つてある、こゝ迄來れば何となく心地が休まるゝ、疲れを覺へて來る、我は高き臺石に尻を掛けて兩の手を杖の先に重ね、今來た道の方を向いて一休みした、この時近く何者か語るが如くに響く、耳を傾てゝその響を捉へ聞けばたしかに小供の語り聲で、それがこの石の背後から起るやうである、我は立上りて、そつと背面を見たが何者も居らぬ、不思議な思をして、もとの石にまた尻を掛けた、同じ響きが確かにまた同じ場所に起つた我も此度はあるものゝ實と在ることゞを稔りぬ再び立つて石の後を見た、前の如くに何者も居らぬ、志かし少しく離れたるところに澤がある、その中が稔い し、足を彼方に向けて近う行けば黒い頭が見はれたなほ近づいて澤岸よりこれを見れば果して一人の男の兒であつた、それが背には孩子を負ふて居るかれは今將に水すくなき空澤の中に小石を並べて堤を築き頻りに流水を導きつゝ人の來たとも心付かで何やらを口にくり返して唱ふるが如く、また歌ふが如く、背なる孩子を眠らしめんとする、志たが孩子は既によく眠りに入つて居る。



我は然して彼の爲すがまゝを見つめつゝ居しに、不圖頭を昂げたる彼の兒は我姿を認め、驚き立上りて知らぬ人なる我を珍らしきものゝやうに仰ぎ見た、我は笑を含んで見下ろしたまゝ、なほ相對した。

眞向に射りたる午後の日がかれの面を明かに照らしてその瘦せたると、靑き色と眞黒な瞳とを我に見せた、我は何事をか問はんとしたが、しかし遂に默して立去つた、かれの遊びを妨げまじき心である我行くべき家は此村の中央よりはやゝ端の方に寄つてある、表を回らした土塀と粗末なかぶき門とが遠くより斜めに見えて門の內なる樫の大木とその蔭に見ゆる萱吹の高き屋根が我心を引つくるやうにむらくと懷かしく思はせた、近くなる一足每に我知らず笑んだ。



我其家の門より入りて戶口に歩み寄るとき閉された障子は開きて內より出でしはこの家の老爺である罵しるが如くに聞こゆる古き語調をもつてよく訪ふて來たとて我を迎へ入るゝとき裏口の方から何知らず入來りし老嫗も我姿を認むるや忽ち喜びの聲を揚げた、老人は何れもなほ無事である我もまた無事であると互に慶んだ、こゝの主人を始め一同は此時外に耕に出でゝの留守であつた。

まづ問ひ度きは此家の變り事ありやなしや、まづ見たきは此家の內と外とのむかしのまゝなるや否や、まづ

語り度きは一別以來の身の上話し、されば問ふても見たり語つても見たり事は前後、所は南北して此日の暮るゝまでを忘れて居た、家の人々は逐々一人二人と歸り來り座はれる我を見付て何れも珍らしげに挨拶した分けてもこゝの主人は久しき間遠ざかりて居たる我身の想像ひしとは違つて丈夫そうになつたと眞實喜んだ樣子で物語りは語りても盡きざればまづゆるくと今宵のことにせんとて酒などを調ひにやる。

「養治」、「養治」との、ゑるが如くに老爺の口より繰返されたが更に返事はなく女共は口々に呟いて尋ね捜す樣子であるこの時ふらくと這入つて來た男の兒は先刻澤の中にて我見しと同じ兒なる背には孩子を負ふたるそれである、かれの姿を見しこの家の老爺の聲は忽ち雷の如く「何所に遊んで居た、何時まで遊んで居る」と罵しつた。



かの兒はさまでこの聲を恐れた樣子にも見えなかつたかれは徳利を提げて再び出で去つた、その跡で徐ろにかの兒のことを我より尋ねてこれを主人は説明した、あなた御存じのこゝの郡長であつた某のあれは息子なるが某の歿後あれの母は好き者ありて重ねてある家に嫁し去つたがその折に若し養ふべきよき家だにあらば呉れ渡し度き由知り人の我に賴み越したれば憫れみ思ふて其時より引取つて養置くがさてもく父には似ぬよくくの愚物で、今更に困じて居るとの事。

今や傭の男女がそこの廣き板の間に相列りて夕飯を喫初めんとする時なれば奥の坐敷の静かなる所にて汲まん語らんと其用意を人に命ずるを我は制し、却てこゝの大きなる爐の邊りにて人々とゝもに語るを好むと答へた、かの兒の調來りし酒は直ちに熱められて我と主人とは酌み初めた、かの孩子は養治の背より傭人の一人なる女の懐に移された。

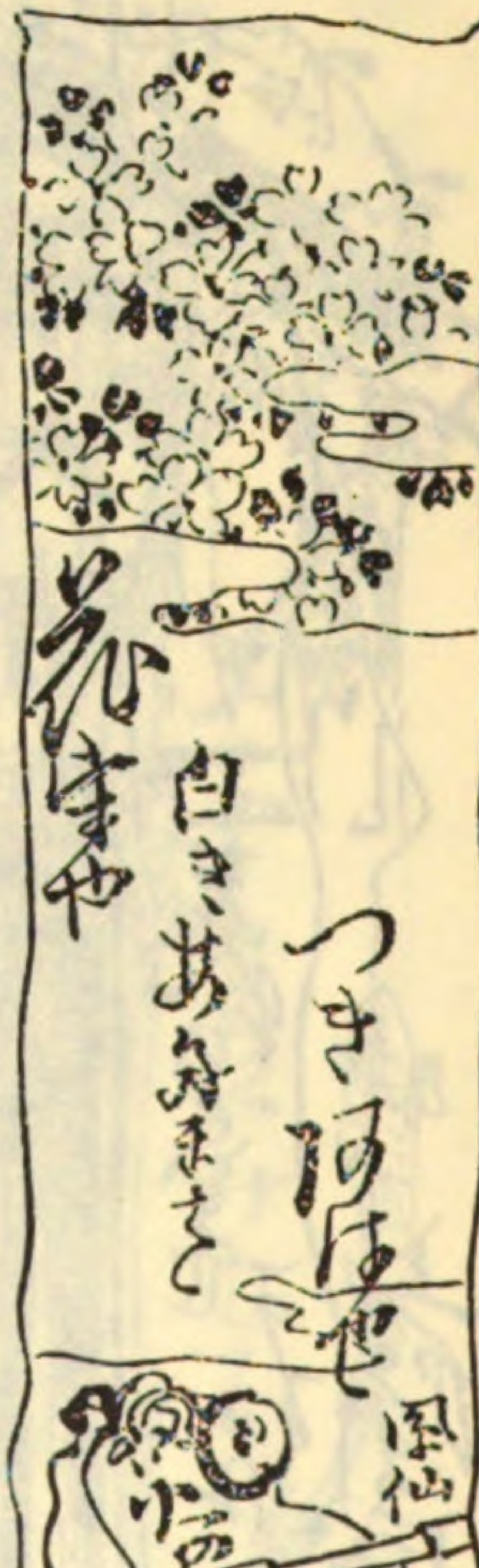


我と主人との談話は酒のすゝむと相伴ふてます／＼濃やかになり、早やすでに食事を畢へたる若者共は爐の向側に無骨なる膝を並べて烟草吸い乍ら我々の談話を聞いて居る、かの兒は我傍近く横になつて目を放さず我顔を見ながら矢張り話を聞いて居る主人はかれに對して「客人の前に寢轉ろんで居るを失禮とは思はぬか、そして貴様は聞いて居てこれが了解るか」と叱し且つ打笑つた、かの兒はしぶ／＼と立上つて爐の向側に若者共の端に移りて爐縁に尻をかけ足をば爐の中に踏み入れて、また我顔を見つめた、左樣に人の面を見るものでないぞと若者の一人二人に誡められても耳には更に感じたとも見えず、しばらくの後には再び來りて我傍に寢轉んだ、主人も我も酒の醉に話の且つ面白ろきに夜の更くるを忘れて、今は已に若者共も立去り老人も寢に就き四邊漸く寂々として我話し聲ひとり冴え天井高き田舍家の内に響いて渡る、されば今宵は寢にせんと冷たき爐縁に手をついて立上る、この時養治は我足元につく

〱と眠つて居た。

翌る日主人は昨日の如く耕に出行くとて、珍らし客人をひとり殘すは本意なき次第ながらけふ早返りすべし書物なりとも勝手に取出して自らをまぎらし給へとて彼方の長持と簞笥と書箱とを指し教て出で丶行つた我は古き書冊を取出して亂讀し半日を消してしまつたが午餐を了へてよくこの家の構内をそ丶ろあるきせんと思立ちて裏口より立出でた。

物置が母屋より引續いて板倉が物置に引續いて廐がそれより少しくはなれてさてそのつぎは竹林である、竹林を通り越せば向ふ一面の平畑で間だ間だに桑の木が立並んではるかに長堤が見ゆる、なほはるかに山が見ゆる、我は竹林の近くに欅の大木の蟠つたる根元に尻を掛けてひとり向ふを見渡し居りたる後の方に音ありて人の歩むが如し、振返り見ればかの養治である。かれは少しく笑みを浮べて我には親みのある一人であると充分に思つたらしく傍らに寄つて來た、きたがこなたより問をかけぬ間はかれは何時までも無言で居る。



「矢つ張り子供を負ふて居るな隨分辛く思ふであろ」と我は話しかけたが、かれはたゞハアとばかり氣のないやうな返事をした「お前はこ丶の家に居て何んな心持ちがする面白ろいと思ふか悲しいと思ふか、または善い所と思ふか悪い所と思ふか」と向かけてかれの返事を催したが、ニヤリと笑つたばかり何事をも言出しそうに見えねば「遠慮せずに語り度いことを構

はず私に迄語つて見よ」と出來る丈けかれに氣を措かせずと勤めて再び問ひ試みたが、かれはたゞ頭を低れて默して居る。

この兒の胸がもし平かなものであらば强て波紋を起さしむるの要もなしとこの類の問をば廢めて、目に見ゆる森のそれ、畠のそれ、耳に聞こゆる鳥のそれ、幽かに聞ゆる物音のそれ等を我は故らに心得ぬ樣子して尋ぬればかれは逐一、かく／＼と得意らしくも物語る、聞いては尋ね尋ねては聞いて言葉の尾をたぐり鰌鮒を捕る手加減など我も面白ろく彼もはずんで聞つ語りつしたある事柄を說くことさまでは拙からずと我には聞こえた、思はず時はうつりて相語らふこゝの槻の下も日の影射さずなつたればいざと立上りて堤の方を一目見れば馬を牽いて行くその男の顏に落日うつれるを、あれはと養治は名を指して一足さきなる我に後ろより敎へてそのゝちは無言になつて跟いて來る、さつきは廐の前あたりを遊び居りし雞どもも母屋の塒に掛け置きし梯子の下のあたりに集つて見ゆる。



我は雞共の雌は梯子を傳ふて上り雄は直ちに飛び上るその塒の下に田舍家の夕方を心樂しく身に感じつゝ暫く佇みしに今しも養治が背負ひし孩子の母が歸り來り裏口のあたりに何やら罵る聲を聞いたかの兒は行ひ欠けしところありとて叱らるゝが如し、しばらくありてあの兒は我傍に來た、背には早や孩子はあらず、しかもかれの面に

はさつきの如きぼんやりした、滿足した、安ずるやうな氣も消え去つたもの丶やうに見ゆる、これよりかれは鼬を捕るべき仕掛にと取掛りしが須臾して見たるその面には何時もの平穩が再び顯はれて居る、この夜も主人と我との談話の間は我坐の傍に寢轉んで、了解つたらしくもなきになほ聞かんとするもの丶如く堪間なく人の面を見つめて居る。

これはこの兒の癖であると我は悟つた然し主人は「貴樣は書物でも讀め」と勸むるよりは寧ろ叱するが如くに命じた、然れども敢てその命を恐る丶もの丶如くにも見えぬ、老爺はこれを繼ぎて例の怒るが如き語を發した然しまたこれをしも恐る丶が如くには見えぬ、この兒は更に何の



感じをも此家の人々の聲より言葉より惹き起さぬものと見ゆる、怠惰けたる態度は誰人の鞭韃にも改らぬが此兒の天性の然らしむるのであるか將た外より吹込みやうの誤てるのであるかと我は疑つた。

この夜も我々の會話の間にかの兒はうたゝ寢の夢を貪り、さて翌くればきのふの如くなる同じ安じたる顏付して孩子を背負ひ庭のあたりを小歌らしきもの口ずさみながら護り遊んで居る、我は奥の一室に虫食んだ書册を取出してけふも亂讀に晝近くまでを送つた、讀書にも倦みたりと立上りてさてかの兒の聲のせぬそと庭に向へし障子押し開けて打見る、そこの椽側の日あたりよきところに、かれは孩子を下ろし

て何所よりか持來りしたんばゝを指のさきにてあしらひ乍ら孩子にこれを見せて喜ばしめんとするものゝ如く、おのれも喜ぶが如く見えた。（未完）



遊女

群書解題

源氏物語《其注釋本》

欲東老人

源氏物語、注釋の書について、いはんには、第一に湖月抄を擧げざるべからず。

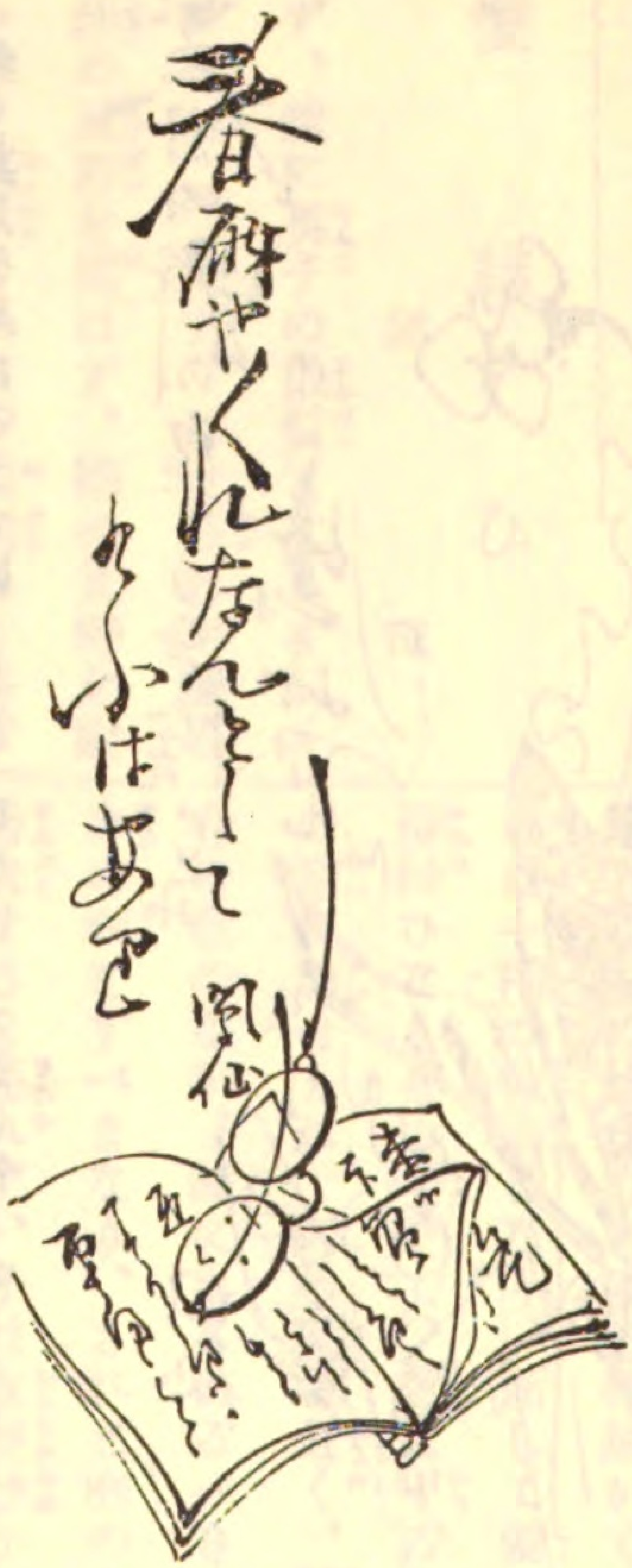
湖月抄は、實に數多き注釋本中、尤も完備せるものにして、およそ源氏を學ばん人の、必ずかくべからざるところのものなり。

湖月てふ名は、式部石山に參籠して、心を湖上の月に照らし、おもひを須磨の浦邊に馳せしと、いふことの上より來り、注者は北村季吟法橋なり。北村季吟名は信澄、通稱は彥助といひ、拾穗軒と號す、近江北村の人なり、初め鄕里にありて醫を業とせしが、やがて京の都に出て、玉津島大明神の社司となれり。

松永貞德に學びて、國文の學に精しく、且つや博聞強記にして、尤も和歌に秀でたり、晚年幕府に召し出され、歌學所の長に補せられて、食祿五百石を給はり、法橋に叙せられ、再昌院の號をたまはる、誠に江戶時代屈指の學匠にして、文學史上一擅たかき人なりけり。

其手になりし處のもの、八代集抄、萬葉拾穗抄、伊勢物語拾穗抄、百人一首拾穗抄、枕の草紙春曙抄、朗咏

和歌集註、増補題林抄、大和物語抄、及び、今玆にいふ、源氏物語湖月抄をはじめとして、其外およそ五十餘種、いづれも共に、注釋其細に入り、微に達して、殘れる隈なく、餘れる隈なく、其後世を益しつる、それ數ふべきにあらざるなり。殊にこの、湖月抄の如き、いよいよ然かり。湖月抄に次いでいふべき、萩原廣道が評釋なり、廣道は、大坂の人にして、近世斯道の大家なり、著はすところ、種々樣々多けれども、其中尤も世を益し、尤も人に膾るべきもの、實に源氏の評釋なり。人はいふ、廣道の評釋は、季吟の湖月抄にもまさる



と、或は然らん、或はまさるものあらん。湖月抄は、雅言を解くに雅言を以てしたるもの、註釋に又註釋を要するものあり、されどこの、廣道が評釋に至りては、雅文源氏の如きを說くに、世の俗言を用ひたる、誠にことのよきを得て、註釋といふ實にも叶へり。初めの程は、評釋といひ、次ぎを語釋といひ、又其次ぎを餘釋といふ。評釋、語釋、餘評を併せて、わづかに數帖、紅葉の賀までにして筆をとめたる、誠におしきことゞもなり。もし此註釋本にして、完結なしたりしならんには、はるかに湖月抄をもしのぎ、單に源氏のみにあらず、數

多き國文國書の註釋中、其優となり、摸範となりて、後の世にいと持て囃さるべきを、何故にそも筆を止めし、惜しむべきのことゝもなり、評釋の初めに添へたる、源氏物語總評の如き、實に有數の名批評、理にやかましき今にしても、多く其比を見ざるまでに、其當を得たるところのものなり。

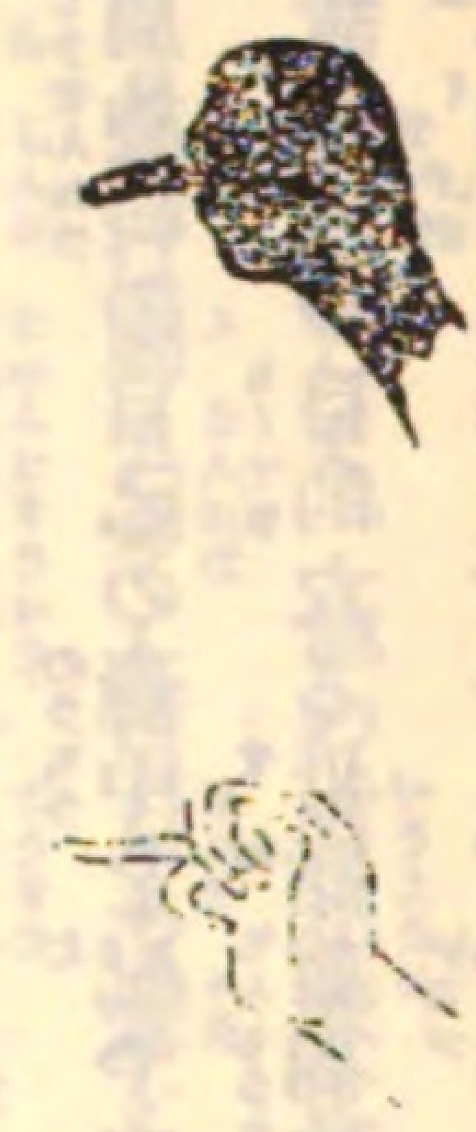
其他、牡丹花肖柏の花鳥餘情といひ、泯江入楚といひ、一々にわけていはんには日も亦足らず、さればたゞ、此二種の外はいはじ。

また、源氏忍草といふなることそ、即ち今の世に所謂名著梗概にして、宏瀚源氏物語の如きものを、わづかに四五冊の内に縮め、然かも其大躰の荒筋を、いと短簡に誤つことなく、傳へたる誠に便利至極なり。



世の源氏を講ぜんと欲する人は、先づ此忍ぶ草によりて、其ことの順序と、其筋道をおぼへ置き、然る後、或る註釋の書、其好むところによりて、これを講じならひなば、大ひに得るところあるなるべし。

其他、水戸の儒者、安藤爲章といふ人の手になりたる、紫女七論といふものあり、これは源氏物語よりは、寧ろ主として紫式部を論ぜしもの、亦これ源氏を講ずるに、よき參考の書なりといふべし。



天狗

家政

女髪結ひ

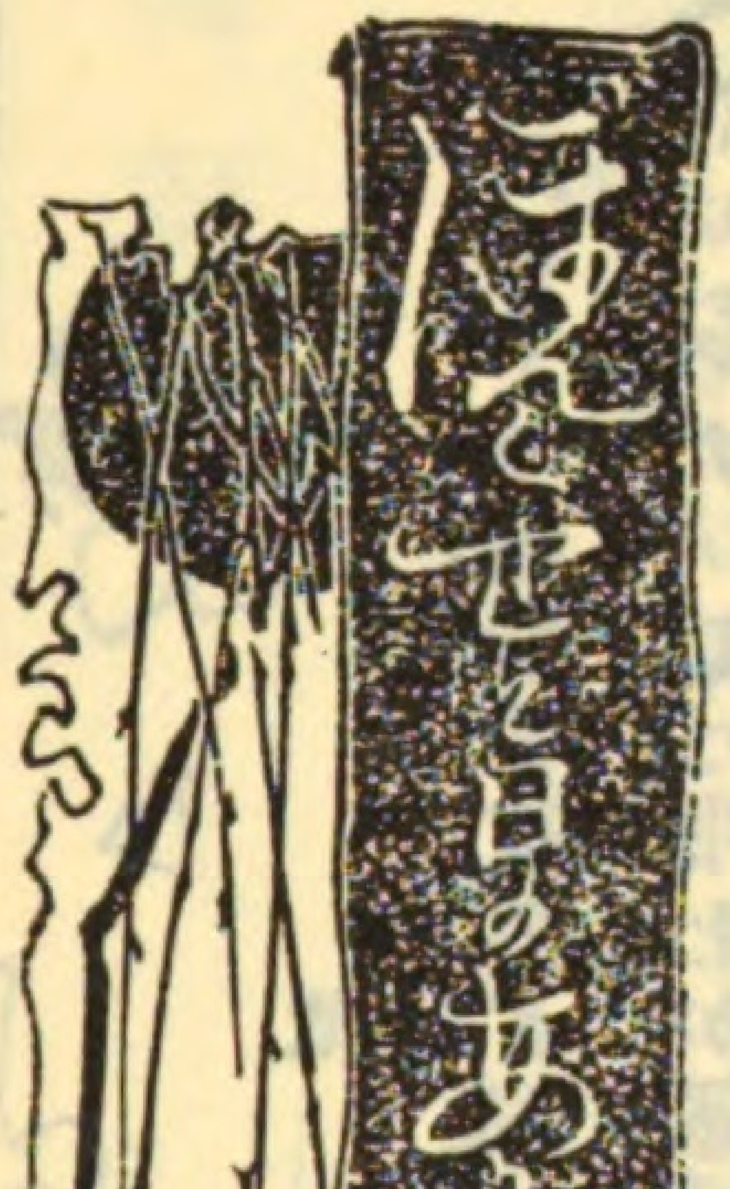
恕哉

逢頭亂髪は禮にあらず、故に男子の散髪とすると同く婦人も亦必理髪せざるべからず、こは唯わが國のみの習慣にあらず、洋の東西を問はず、國の文野を論ぜず、假りにその結ひ方と格構とには、異同ありとするも、總じて髪を結はざるの地方なきが如し、これ頭髪は婦人の優美と、密接の關係を有するものにして、又婦人は成るべく優美にして、禮儀あるを尊ぶより起りし自然の傾向なるべきか、而してその結ひ方も格構も順次變遷發達して、娘には島田髷、銀杏返し、新蝶々、桃われ、稚子髷等の娘らしき結ひ方あり、又妻君には丸髷、後輪等ありて、一見その處女たると、既婚者たるとを識別し得るの便利を有するに至れるは、これ又自然發達の結果なるべきか、

婦人頭髪の結ひ方の變遷發達かくの如し、從ひて髪結ひは一種の技術となり、而して爰に技術者乃ち専門女髪結ひなるもの生じて、時に甲の屋敷に招かれ、又乙の家に聘せられ、丙の宅に赴く、個々分業を重んずる今の世のなか、誠にさもあるべきことにして、大に總方の利とすべきなり、されど利のある所は往々弊害の潜伏するを免れず、予は女髪結ひなるものゝ利益あるを認むると同時に、又大に弊害の存するあるを認むるものなり、

女髪結ひなるものは、技術者として餘り高尚なる職業にあらず、高尚なる職業にあらざる丈け、その思想も

下劣なり、而してその下劣なる思想を抱きて、或は甲の家に出入し、乙の宅に行き、丙を見舞ひ、丁に赴く、その言ふ所多くは、甲の娘の評判にあらざれば、乙の妻君の噂なり、時に丙の悪口を饒舌り、丁の穴探しをなす等、一家の内情及び秘密は、往々この女髪結ひの口より世間に泄るゝの例尠からず、女髪結ひなるもの時としては奉公人口入をなし、嫁入りの世話を爲し、婿取りの周旋をなす、これ乃、女髪結ひなるものゝ、各家に出入して種々の弊害を生ずる所以なり、かれの心已に下劣なり、世話をなすと云ひ、周旋をなすと云ふ畢竟世話賃周旋料の自己の嚢中を肥やすの目的あるがためなり、故にその目的たる世話賃周旋料の多きときは、三平二滿面に笑を含みて、一圖にその家のことを



褒め立つるも、もし報酬の額、自己の意に充たざるが如き場合あらば、口を極めて悪口罵詈し、遂にはそのうちの家名にも拘はるが如きことなしとせず、これ往々女髪結ひなるものが、小新聞紙第三面の艶種を作り、社會に弊毒を流す所以なり、

職人工女等は、朝早くより日沒まで、腕限り根限り働くべきものなれば、閑隙も少なきため、輕便を主として女髪結ひを煩はすの必要も多し、されど中等以上の生活をなせるうちにては比較的閑暇も多く、且婦人たるものゝ收利も無きが常なれば、かゝる宅にては婦人たるものは、職人女工などゝは異なり、格別良人の財嚢を煩はさゞるよう心懸けざるべからず、故に予は中等以上の家庭に向ひて、女髪結ひを聘して種々の弊害を釀

さゝるの覺悟を勸むると同時に、一家の經濟上よりも髮結ひ賃を節約して、他の有用費に充つべきなり、維新前にありては婦人多くは自ら髮を理むるの習慣ありしと雖、維新後順次流行の潮流に伴ひて、その風も減却し、今や何れの家にても女髮結ひを聘するの習慣となれり、前述の如く閑隙少なきものは兎も角も、少しにても時間の餘裕を有するものは、必ず自ら理むるの習慣を作り、又子女をして幼より自ら結はしむるの習慣を養成すべきなり、さすれば第一には一家の費用の幾分を節し、第二には女髮結ひの出入りより生ずる種々の弊害を防ぐことを得べきなり、

婦人の職務として、裁縫、割烹等の心懸けの必要なると同じく、髮結ひも亦婦人の爲すべき職務中の一に加へ、是非とも自ら髮を理むるの習慣を作るべきことなり、

又女髮結ひの出入りは、家庭に贅澤を輸入するの媒介たり「何處の奥様はこの頃根かけの玉をお買ひになりましたが立派ですこと」「かしこの阿孃樣は流行の簪をお求めなさいまして能く似合ひますこと」など、女髮結ひの口は、よく流行を紹介し、贅澤を敎ふ、婦人がその言を聞きて心中如何に感ずるや、流行を趁ひたきは婦人にあり勝のことなり、そのあり勝ちの氣質に向ひて流行を敎唆す、などかその言に習はざらん、などか流行に從はざらん、遂にこゝの家庭も、かしこの家庭も、その流行贅澤の風に靡かさるゝに至る、これ又女髮結ひの出入りより、家庭に弊害を與ふる一事なりとす、



鳩

西洋手品（續）

◎袋と雞卵

更紗を以て二重の袋を作りその內側の上部に袋と同じ布にてポッケット形のものを縫ひ付け、その內に五六個の雞卵を入れ置きて之を觀者の前に持ち出し、雞卵のある個所を右手に押さへて、前後左右に打振り中に一物も藏めざるを證し、尙ほ袋を裏返へしてその內側を示すなり、されど此時ポッケットの部分は後にして觀者の目に止まらぬやうにすべし、又その裏を撿べんとて兩手を袋の兩端に置き急に前後に回轉すれば、ポッケットの脹らみは觀者の目を掠めて何時も後方に止まるものなり、かくして

此の中に牝雞が這入りました、

と言ひつゝ耳を袋の口に近づけて鳴聲を聞くが如き眞似をなすと同時に自らコッケッコーといふべし、然して又、

牝雞が卵を生んで行つた樣です

と言ひ、袋の內に右手を差入れ、ポッケットより雞卵一個を取出して靜かに袋の底に滑らし、左手を以て外より袋越に之を握り卵の形を示すべし、それより雞卵を袋の外に出してその實躰を觀者に顯はす時は、此の手品の一段落を終はりたるものにて、ポッケットに雞卵の盡くる迄は幾度も此法を繰り返すを得れば、之を見る者は雞卵の袋より出る度每に驚き怪みて己が眼を擦る事ならん。

◎火を食ふ術

火は恐るべきもの、之に觸るゝ時は大厦高樓も一夕にして灰煙と散失せ、花を欺く乙女の顏も一朝の過失にて醜くゝも燒爛るゝものなれば、火の用心と炭火の取扱は謹みても謹まざるべからざる程の危險の物なるに、命の瀨戶と賴む口中に如何にして入るゝを得るか

と怪しむものもあらんが、狂馬も御するに其法無きにあらねば、これも案外容易に爲し行はるゝなり、先づ白き木綿糸を硝石の溶解水に浸し、五六分經たる後之を取出して火に乾かすべし、それより此の木綿糸を適宜の大きさにまるめ、その周圍を一寸許に裂きたる麻の細片にて被ひ、糸の一端に火を點けて口に入れる時は火は麻に遮られて舌には決して當らぬなり、かくして口を開けば煌々たる火光の咽喉許まで照り渡るを見るべし、又口を閉ぢれば直ちに火は消えて麻のみ殘れば此時呑むが如き眞似して竊に之を吐き出し、再び用意したる別の糸に點火して前に爲したる法を繰り返さば何時までも火を食ふ事を得るなり。



驢馬

家内經濟（三）

（簡易生活）

◎先回据風呂の事を記したるが、尚ほ遺漏せし事あり、据風呂に用ゆる燃料は松薪も宜しけれど、これのみにては偶々風呂釜を傷くることあり、されば湯の大概沸くまでは薪を用ゐそれよりは炭火に代ゆるか、左なくば炭火を以て始めより焚すべし、充分沸きたる時は、風呂釜の上に瓦の如きものをかぶせ、炭火の儉約を計るを要す、何となれば其口をかぶせねば炭火はずん〳〵燃え盡き、其湯を一日保たせんには頗る不經濟なり、たとへば朝九時頃より焚き始め十一時頃に浴湯の出來るやうになれば、家人それ〳〵浴湯し、さて又夜間其湯に浴せんには、放擲し置けば湯は冷えて元の水にかへる、水にかへれば再び沸かす勞を取らざるべからず、さればとて無用に薪又は炭を投じ置くも不經

濟の甚しきものとなる、かゝる場合には一握の炭を入れ置き、其風呂釜の上に瓦又は延鐵の如き平坦なるものを載せ置く時は、夜の七八時まで湯氣のさむる患なし、夜に入らんとする時、又一握の炭をつぎ加ふれば、少時にして適當なる湯加減となるべし、風呂釜の上口を塞ぎたりとて、釜の下口より空氣の流通自在なれば火の消ゆる氣遣なし、

◎近來は桐材の價大に沸騰して家内用品に影響を及ぼすこと一方ならず、簞笥の如きは殊に著しきものなり、前桐の簞笥は一昨年頃までは三圓臺にて購ひ得たれど今日にては五圓臺ならではなか〳〵得やすからず、總桐に至りては又格別の騰貴にして六七圓のもの、現今にては十圓以上ならでは使用品とするに足らざるに至る、古物も之に準じて價格昇り、却つて新物よりも割合に其價を引上げ、能く使ひふるしたるものは、新物との價大差なきまでになれり、而して總桐製の安價物は分薄にて細工惡しく開閉にがたぴしゝて使用甚だ自由ならず、かゝる品物を求むるよりも、若しも古代物にて塗色の總桐又は前桐あらば、削りて金具を代えば新しきものとなるなり、惣じて古代物は細工丁寧にして板の分も厚きものゆゑ大概削りても、今物よりも遙に確實なり、鉋をかけるには敢えて指物屋に委頼するにも及ばず、表面をけづりて金具を取りかゆるまでの仕事なれば、出入の大工を雇ひなばそれにて事足るべし、一日四十錢又は五十錢の工手間にして二日も雇ひなば、一圓内にて間に合ひ、之に二圓内外の金具をつくれば、總桐ものなれば今日確に十五圓以上のものに相當すべし、但し桐材は蟲のつき易きものゆゑ、虫喰の痕あらば削りても詮なし、

◎桐材の事につき思ひ出したり、或人曰く西京人の履は後がへり、大坂人は履物は前の齒がへるなり、これは西京人は道を歩くにも悠々たる風あり、大坂人は

道を歩くにも齷齪の風あればなりと、併し人の足は自づから踵の方へ力入りて爪の方へは左程力入らず、されば十人の中八九人までは履物は後の方がへるなり、駒下駄などは花緒よりも表よりも第一番に臺が減りて(殊にうしろが)穿かれぬやうになれど、其まゝ捨つれば、不經濟のみならず、今日の如き桐材騰貴して下等のものにても五十錢以上ならざれば桐臺の駒下駄は求め得られぬ時なれば、中等以下にては一々容易の事ならず、臺をばつけかゆれば再び使用に堪ゆれど、まだ前の方が滿足してあるものを無殘々々取りかゆるは、これまた不經濟たるを免かれず、それゆゑ此頃は後の方だけを取りかゆること家政能き家庭に行はる、雨下駄に齒を入れかへて使用に適する如く、駒下駄も同樣なり、これは最寄の下駄屋(自家にて製造する下駄屋)へ委賴すればよし、



狼

女子職業案内

メリヤス機械編に就て

再三記載したる此職業に就きては讀者諸君より其詳細を尋ね越さるゝ向多く其要點は大低同一なれば今玆に靜岡縣小笠郡の人山本勘藏氏よりの照會書の箇條と東京芝區新櫻田町鈴木メリヤス製造所との返答を掲げて大方諸君への答辭に代ゆ

問

(一)靴下編專門機械を改良小丸と稱す

(二)同種口織りを他の機械にて造るは普通小丸なり

云々
右は改良小丸と申す機械なれば他口織機械を用ひずして只一臺の機械にて悉皆出來上るの意に有之候や將た改良小丸にて一通り編み普通小丸にて口織をなし二臺の機械を用ひて始めて完全の靴下出來すると相考へ可然候何分の御指示煩はし度

（三）一ダースの靴下を編むには何程の紡績糸及毛糸（代價とも）を要し其製品何程に問屋へ出し賣行候や

（四）普通一臺の機械にて一日の稼ぎ高何ダースを製し得られ候や

（五）毛糸又は紡績靴下編のみの素修は普通何日位の豫定にて可然哉

（六）靴下編のみの教師を聘するに五日亦は十日間位にて何程の謝儀なれば出張致さるゝものに候や

以上

答

（一）靴下編專用機械改良小丸と稱するは靴下のみに製造する用に適し此機械にて造る靴下の織地は改良畔織、平織の二種なり口元より爪先迄此機械一臺にて造を得るものにして初心に習ひ覺へ易し但し一臺にて靴下の形を造り得る機械也爪先きは手指以て少々かゝり合す右改良小丸價格騰貴し一臺（百二十本キカイ）にて代價三拾六圓五十錢外に針の代三圓六十錢を用す

（二）普通の小丸は初心に最もわかり易けれど製造に係るものは織地（平織）一種なり此小丸にては靴下の口元は他の機械にて造らざるを得ず右小丸は一臺にては靴下に出來上らざる物なり（針數百二十本機械にて昨今廿二圓位）

（三）一ダースの靴下を編む原料の多少は地質の厚薄に因るもの故一定せず造り方次第にて原料一打

に付假に代一圓に二百目の元金を用ゐたる物を問屋に一圓三十錢位に卸し針數の少き物は原料代に二拾四五錢増位但し針數の多き物は以上百六十本位の機械にて造る物は五六七十錢位を増て賣價とす

(四)普通一臺に付一日間百二十本機械にて二打位を造るなれ共職工の熟不熟に因て大差のある者なり凡稽古に看手後六ヶ月も經ば一種丈け造るには成業者となり然る所甲は器用にして一日に三打を造り乙は二打を編み丙は一打も六ヶ敷く二三年間熱心に勉强するものにても丙の如きは普通の過半位より多分には造り得ずこれは善良の機械ありと雖人天性の器用不器用による也

(五)靴下機械編稽古は凡三ヶ月位

(六)教師として足るべき職人は一ヶ月金十圓以上の振合と知り玉へ



社交一斑



流行の栞

流行子

流行の履物

婦人の駒下駄には兩ぐりの高さ一寸八分位の臺に、幅廣の南部表付けたるもの專ら流行す、横鼻緒は草色の風通織第一流の勢なり、表は鬼藤表にしたるも追々流行するの傾ありて、これは表の汚れざる爲めにや多く好むものあり、賣捌店に依て聞くに代價は大抵壹圓五拾錢位なりと云ふ。

それに次ぎては、堂島の横柾に藤晒(純白)表付けたるもの流行す、鼻緒は鶯茶のブラシ天のもの普通なれど、又本天の珍色

に赤の一文字入りたるものも多く見受くるなり、これらにて九拾錢位の代價とす。

男子用の駒下駄は南部表にて、臺は堂嶋の横柾の高さ一寸七分位のもの最もよく流行す、鼻緒は鼠色の一樂の裏皮か、草色の風通織を一等とし、又具足織、紅梅織等もよく流行す、代價は凡そ壹圓五拾錢位なるものとす。

安　帶　袋

此錢入袋は新意匠を率先とする伊勢新袋物店の製作にかゝり、其名の如く自身にては隨意に取脫自在なれども、一旦帶に附け口金を合せ置く時は、狹猾の掏摸と雖も容易に其術を施すべからず、安心して帶ぶことを得るといふ邊に意匠あり、此袋は銀貨のみならず、紙幣も容れられ、表裏に「かくし」をも附けあれば時計などの位置とするに足り、帶〆の代用ともなりちと工夫過ぎる嫌はあれど、製作美術的なれば實用を好む男子の間に先月來より流行し始めぬ。


蝶

雜　録

大　江　匡　房　（口繪のとき）

大江匡房卿若かりける時藏人にて内裏によろぼひありきけるを、さる博士なれば、女房達あなづりて、御簾の際によびて、これ彈き給へとて、和琴をおし出したりければ匡房よみける

あふ坂の關のあなたもまだ見ねば
あづまのことはしられざりけり

女房達、かへしえせでやみにけり。


乗筏

功名と命

詞に、命ありての物種とは、よくも穿ちたる詞なり、たとへば、燃ゆるが如き、精力ありとも、山の如き資産ありとも、もし命あらずんば、期望それ如何にして達せらるべき。

一簣一簣、又一簣と、土壤おのづから多く積んで、遂に見上ぐる山となる。

一功一功、又一功と、功名おのづから多く積んで、遂に大名、千歳ほろびざるの人となる。

土壤其數を積むもこれ時日なり、功名其數を重ねんも亦時日なり、山の遂に大ひならん、一つに多くの時日を要し、人の遂に大ひならん、一つに長き命を要す。

長命なるかな、長命なるかな、長命はこれ、人間成功の第一要路なり、第一捷徑なり。

遠き外國のことは暫く措き、これを我が國の史に見る

に、各々其道に通達して、名を一世にたかく揭げ、譽を萬歳に垂るゝ者、多くは長命の人なりけり。

歌聖人麿の如き、其年齡をつたへざれども、數朝に歷仕なせしといふからには、必ずや、長命にしてありしなるべし。

其他年齡の詳かならざるもの、猶々少なからざるなり、これ等はことごとく後へまわし、今はたゞ其詳らかなる人ばかり、數へ見んに左の如し。

九十歲以上、土佐光信(畫家) 俊成卿(歌人)
北齋(畫家)
八十歲以上、鳥羽僧正(畫家) 季吟(國文學者)
雪舟(畫家) 肖柏(俳人)
宗長(連歌師) 宗鑑(連歌師)
元信(畫家) 梅室(俳人)
貞德(俳人) 宗祇(連歌師)
馬琴(小說家) 定家卿(歌人)
兆殿司(畫家)
七十歲以上、杏坪(詩人) 宗因(俳人)

雅望（狂歌師）　秋成（國文學者）
文晁（畫家）　南海（詩人）
千代（俳人）　景樹（歌人）
一蝶（畫家）　眞淵（歌人）
宣長（國文學者）　其磧（小說家）
六十歲以上、一九（小說家）　抱一（畫家）
出雲（作者）　春海（歌人）
貫之（歌人）　笛浦（詩人）
種彥（小說家）　契冲（國文學者）
五十歲以上、半二（作者）　光則（畫家）
光琳（畫家）　山陽（詩人）
西鶴（小說家）　芭蕉（俳人）
等にして、いづれも五十歲以上なり。
然して、其五十歲以下にしては、
四十歲以上、華山（畫家）　三馬（小說家）
蘆雪（畫家）　甚五郎（名匠）
等わづかにあるのみ、然していよいよ下りては、三十歲以上の人に、滉化、重恭の二人あり、二十歲以上の人に、實朝、保吉の二人あるのみ。
この他なほ、調らべ見れば多くあるべし、折もあれば、其欠けたるを補ふべし。

拙速といひ、早熟といひ、其他いろいろさまざまに、早きを貴とぶ詞もありて、功の早きをたゞゆれども、動かざるところはこれ、大器晩成といふことなり。

年ごとに、僅かに伸びる楠に、おそろしき大木ありて、春ごとに、或は三尺、或は五尺、さら／＼はど伸びるものに、反つて大木のあらざるなど、實にこれ眼前の的例なり。

諸子たゞ功の早きを求めず、たゞ晩成の大器たれ、然してその大器たらんには、晩成の二字、即ち讀んで字の如く、おそく成るといふこと、尤も注意すべきなり。

おそくなる、これ長命にあれといふなり、長命はこれ衞生のよろしきによる、さていふまでもなきとなり。

上に列擧なしたるもの、もし其參考にもなりなんには、漁り求めたるの甲斐はあり。

長命なるかな、長命なるかな、長命はこれ、人間成功の第一要路なり、又第一の捷徑なり。

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味掛きものなり之れには彼スコット乳菓の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるが最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居徳兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

長新袋

一名 安帯袋

專賣特許出願中



御好みに應し特別上其他種々調製可仕候

◉甲價　金二圓

◉乙價　金壹圓七十五錢

◉丙價　金壹圓五十錢

（遞送料五拾錢）

為替振込銀坐郵便局郵券代用二割増シ

圖の如き安帯袋は是れ弊店が本邦袋物固有の妙技なる雅致を存し加之ならず現今の文運に伴ひ實用に適せしめんことを主眼とし種々考案の末完成し農商務省特許局へ特許出願したるものにして今般江湖に發賣し茲に御愛顧諸彦の芳志に投ぜんとす委くは別項要目御賢覧之上陸續御購求の榮を玉はらんことを謹言

一此安帯袋はこれ迄世上に有ふれざる特種の縁金を心とし圖の如き風致ある形状の袋を堅固に縫ひ附けたるものにして表裏何れへも隠袋を取付け金錢其他時計等貴重の御所持品を混ぜずして各別に仕舞置くことを得

一此安帯袋は自身にては容易に任意取脱し得るといへども一度帯に取附けて口金を喰合せたるときは盗兒が如何なる方法を用ゆるも彼の蟇口又は腰下等の如く掏り取ることを得ず極めて安全に金錢其他時計等を腰部に帯ぶるを得

一此安帯袋は單に腰に帯びて用をなすのみならず口金を喰合せ置きて洋服持に使用することを得

一裂地は古今の有ゆる織物又革皮等御好に應じ實用と品位に注意を加へ製作すれば諸彦に不向の弊毫もなし

右之物品御購求後貴意に叶はざる節は御購求當日より七日間以内に他品と御交換或は原價にて買戻し可仕候（但し特別御注文の品は此の限りに非ず）尚地方は御送金次第送荷可仕候

登録商標

袋物類金銀彫刻美術品

商 伊勢新

東京市京橋區尾張町二丁目八番地

（明治二十五年九月十四日遞信省認可）

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地株式會社秀英舍印行